

多世代同居に求められる社会的スキルとその獲得過程に関する実証研究

-多世代葛藤における対処方略の分類と青年期女性が認知するイメージの検討-

生田倫子¹・下川恵²・並木恵祐³・高橋誠⁴・東海林麗香⁵

(慶応大学先端研究所¹・駒沢女子大学大学院²・東海大学大学院³・武蔵野大学心理臨床センター⁴・東京都立大学大学院⁵)

<要 旨>

多世代同居家族の研究は社会的な知見に偏っており、また嫁姑葛藤などネガティブな側面が強調される多世代同居研究が多い中で、同居に必要な社会的スキルや満足度、同居メリットなどポジティブな側面に着目した心理学的研究は数少ない。本研究は多世代同居家族における心理学的側面の包括的研究として、主に多世代同居経験のある子世代の妻(嫁)へのアンケートと電話インタビュー調査が行われ、以下の5つの研究段階から検討がなされた。

研究1では属性変数と同居満足度の関連の検討がなされ、妻の就業形態、学歴、義母の年齢などが同居満足度に影響を与えることが示された。また、研究2では、プロトコル・データから同居に必要なとされるスキルを同居促進要因としてカテゴリー化がなされ、姑とは距離を保ち、家族に配慮しつつ、自分はあるがままでいられるようにすることが適応促進的であることが示された。研究3では同居のメリット・デメリットの語りのカテゴリー化がなされ、養育面、金銭面、情緒面などでのメリットがまとめられた。研究4では、嫁、姑、夫関係をバランス理論と家族イメージから検討し、姑の勢力が高く、姑との関係が密になるほど、嫁は家族をアンバランスであると捉える傾向があることが示された。さらに研究5では、妻方多世代同居経験者への電話インタビューのプロトコルから葛藤と対処方略の質的検討がなされ、夫方多世代同居にはない実親同居の特異な葛藤形態を先駆的に示すことが出来た。以上の知見から、多世代同居に必要なとされる社会的スキルの提案と考察が行われた。

<キーワード>多世代同居家族、社会的スキル、同居満足度、家族イメージ法、対人葛藤

【はじめに】

世帯の核家族化は、工業化した国々に一様に見られる現象である。日本においては、年々減少しているものの、直系三世以上の子世代が未だに存在しており、さらに60歳以上の人口に限れば、約5割が子どもとの同居世帯を形成している(厚生労働省, 2008)。このように多世代同居がいまだに現存している現状は、先進国には異例であり(柏木, 1998)、批判の対象となることもあった。しかし、社会学の見地から、実父母や義父母と同居する家族形態である「多世代同居」は、子を持つ母親の就業を促進する要因として検討がなされており、実際に就業促進的に作用することが実証されてきている(西本・七條, 2004; 前田, 1998)。さらに日本の多世代同居の家族形態は、福祉負担が逼迫している欧米各国から、公共の福祉に頼らず私的に介護機能を担う家族形態として注目を集め始めている(Leyendecker & Schoelmerich, 2006)。

だが、日本における多世代同居に関する知見は、介護・福祉領域や、住宅環境領域、また社会的な大規模調査・考察に偏っており(張・

七條・駿河, 2001; 滋野・大日, 1999; 山上, 1999; 永瀬, 1994, 1997; Morgan & Hiroshima, 1983)、心理学的側面に着目した研究は極めて少ない。心理学的側面から、亀口(2003a)は現在の祖父母世代が「家族神話・儒教文化」、親世代が「欧米文化」、子世代が「電子文化」とそれぞれ異なる文化背景を持っていることを示している。この世代による差だけでなく、各々の家庭のルールを持ちあうことでの、関係形成・維持における心理的困難が多いことは経験的に知られていることであり、世代間の異なる世代と文化を持った他者同士が生活を共にする多世代同居は、わが国では嫁姑問題として心理的困難さが強調されているが、反対に多世代同居のメリットや満足感、そして適応過程に関する実証的な知見は数少ない。

以上のような問題提起から、本研究は、多世代同居についての包括的研究を目指し、実証的に検討することを目的とした。主に夫方の両親との同居経験のある子世代の女性の視点から、同居家族に関する多角的な実態調査を行った。

具体的には、多世代同居経験のある子世代の女性にアンケート調査と電話インタビューを行った。検討は、五つの研究段階に分かれて進行した。以下、五つの研究段階を概観する。

多世代同居の定義

多世代家族の定義として、先行研究より「夫婦、子供、親と他の親族からなる世帯」(西, 2001)、「三世代同居家族」(今川・譲西・齋藤, 2001)、「上方拡大家族」(鈴木, 1987)などがあげられるが、「親」「世代」という言葉がそれぞれの基準によって異なるため、本研究においては、平均的な多世代家族モデルにおいて一番下の世代に位置する世代を孫世代と定義し、それを基準に、その親を子世代、その親を親世代と定義する。そして本研究の対象である子世代の女性の視点からみて、“自身と夫、義父母、実子を基準とした(義兄弟・義祖父母も含む)三世代以上の家族が同居している家族形態”を多世代家族と定義する。また、子世代の夫の両世代との同居を「夫方の多世代家族」、妻の親世代との同居を「妻方の多世代家族」とする。以下、子世代の妻を「妻または嫁」、子世代の夫を「夫」、親世代の妻を「義母または姑」、親世代の夫を「義父」、孫世代を「孫」と略記する。

研究1：同居形態や属性変数と同居満足度との関連

問題と目的

同居の満足感にどのような変数が影響を与えているかを検討した研究は数少ない。よって本研究では主に夫方両親との同居経験のある子世代の女性の視点から、同居家族の実態を調査し、本人や家族の特性、住居形態が、同居の満足感にどのような影響を及ぼしているかを検討する。具体的には、多世代同居経験のある子世代の妻へのアンケート調査を実施し、妻本人の就業形態や最終学歴、また同居家族の住居形態や義父母の年齢などの属性変数を得る。さらに電話インタビューから、子世代の妻が感じている同居満足度と属性変数の間に関連が見られるかを検討する。

方法

調査対象 現在または過去に夫方の多世代同居経験のある子世代の妻を対象に、講演会、ホームページ等で募集を行い、24名から調査協力の承諾を得た。

事前アンケート 電話インタビュー前に、メー

ルにて事前アンケートを行い、属性データの収集が行われた。記入に不備があったものを除いた19名の調査協力者とその家族成員の主な属性は以下の通りである。平均年齢は妻 43.28歳 ($SD=6.83$, 31歳~56歳)、夫 46.29歳 ($SD=7.89$, 30歳~62歳)、義母 72.29歳 ($SD=8.18$, 55歳~86歳)、義父 74.30歳 ($SD=8.72$, 60歳~90歳)、孫 14.40歳 ($SD=7.93$, 1歳~32歳)であった。その他の妻と同居家族の属性をTable1に示す。

同居家族の構成	義父母と同居11組、義母のみと同居7組、不明1組
子世代夫婦の結婚年数	平均17年5か月
同居年数	平均11年5か月
孫の平均数	平均1.44人 ($SD=7.93$)
義父母との同居	あり2組、なし17組
義兄弟との同居	あり2組、なし17組
妻の最終学歴	大学8名、短大4名、専門学校1名、高校4名、不明2名
妻の職業	フルタイム8名、パートタイム5名、学生1名、自営業1名、専業主婦4名、産休・育休0名
住居形態	完全同居16組、二世帯3組
台所	一緒15名、別々4名
食事	一緒15名、別々4名
家計	一緒12名、別々7名
親の多世代同居経験	過去にしていた7名、現在もしている2名、同居経験なし10名

電話インタビューの質問項目

東海林(2006)で用いられた面接項目を参考に、本研究の為に作成された。主な内容は、①自身の仕事に関する質問、②同居に至る経緯(きっかけ、同居の主導者、同居に対する気持ち、同居の理由、夫との見解の一致[度]、夫が長男か否か、居住の仕方、居住についての主導者、他の居住形態の可能性)③居住形態に関する質問(台所、食事、家計についての詳細)④同居のイメージについて(同居前と同居後でのイメージ得点と変化)、⑤多世代間葛藤のエピソード(理由、きっかけ、対処、他の家族への影響、頻度、重要度、問題がなかった場合、対処への評価点、理想的な対処)⑥問題と対処のパターン(パターン化の有無、理由、他の展開の可能性)⑦家族の雰囲気、⑧同居のメリット・デメリット(内容、他の家族への影響、家族にとってのメリット・デメリット比、自身にとってのメリット・デメリット比)、⑨今後同居する人へのアドバイス、であった。

結果

インタビュー内容の中で得点化された項目である、a. 同居に関する夫婦の見解の一致度、b. 同居前のイメージ得点、c. 同居後のイメージ得点の平均値(SD)、さらに d. 家族のメリット・デメリット比、え e. 自身のメリット・デメリット比のメリット得点を“同居満足度”

とし、その平均値 (SD) を Table2 に示す。

Table2. 得点化項目の平均値と標準偏差		
	平均値	SD
a. 夫婦の見解の一致度 (%)	84.67	16.31
b. 同居前のイメージ得点 (100点)	70.87	25.8
c. 同居後のイメージ得点 (100点)	75.67	30.23
d. 家族の同居満足度 (10点)	6.61	3.35
e. 妻の同居満足度 (10点)	6.11	3.45

続いて、妻の就業形態 (フルタイムか否か)、最終学歴 (大学卒か否か)、住居形態 (完全同居か二世帯か)、姑の年齢 (75 歳以上か否か) をそれぞれ二群にわけ、妻の同居満足度に差が見られるかを検討するため、対応のない *t* 検定を行った。結果を Figure1 に示す。妻がフルタイム就業の方がその他 (パートタイム、無職など) よりも同居満足度が有意に高く ($t(16)=3.316, p<.01$)、妻が大学卒の方がそれ以外 (短大卒から高校卒) よりも同居満足度が有意に高かった ($t(15)=3.751, p<.01$)。また、有意差はなかったものの、義母が 75 歳以上になると同居満足度は顕著に低くなることが示された。住居形態に関して、完全同居と二世帯居住によって同居満足度に有意な差は見られなかった ($t(16)=0.077, n. s.$)。

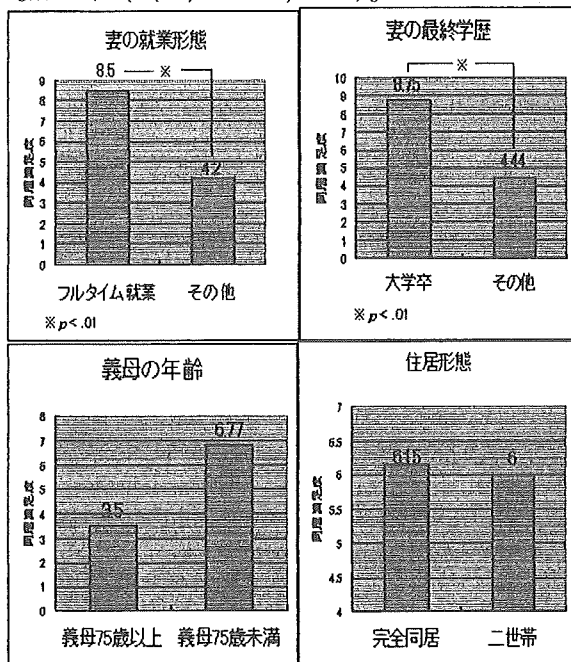


Figure 1. 同居満足度の各属性変数群間での比較

考察

フルタイム就業の子世代の妻は、それ以外の就業形態の妻よりも同居満足度が高く、また、義母が介護年齢になる 75 歳以上の家庭では妻の満足度が低下するという結果は、前田 (1998) など、社会学の知見と一致するものであった。しかし、居住形態が満足度に大きく影響するという予測に反し、完全同居と二世帯という住居

形態による違いは、同居満足度に影響を及ぼさなかった。また、本研究では妻の最終学歴が大学卒だと、それ以外の学歴のものよりも同居満足度が有意に高いという結果となり、高学歴者が同居への不満が高いとする先行研究の知見と異なる結果が得られた。これは、高学歴の妻が満足度のいくフルタイム就業を得られるためとも推測されるが、今後は仕事と学歴の関連を検討する必要がある。

研究 2 : 嫁が認知する同居の適応促進要因に関する質的検討

問題と目的

三世代家族に関する研究には、その家族形態などの特徴から、嫁姑関係に言及したものがいくつも見られるが、それらは両者間の心理的葛藤の分析とその解決に焦点が置かれているものが多く、同居の適応促進要因に関する知見は数少ない。

よって本研究では、夫方の両親と多世代同居を経験した女性へのインタビューにより、同居の適応促進要因について検討する。

方法

データ収集の内容は研究 1 に準ずる。データ分析の手続き 電話インタビューの逐語記録を起こして発話データとし、以下のように分析を行った。①切片化: ローデータをそれぞれが単一の意味をもつような断片にした。②コーディング: それぞれの切片に対し、その内容を表す単語や短い語句 (コード) をつけた。③カテゴリー生成: コーディングされたデータを比較し、似た者同士をまとめ、そのまとまりに名前をつけてカテゴリーを生成した。さらに内容的に共通の上位概念で括れる複数のカテゴリーをまとめてカテゴリー・グループを編成した。

結果・考察

本研究で生成されたカテゴリーとして、【対人関係】、【家族形態】、【自分自身】という 3 つのカテゴリーグループ (以下 CG) を得た。なお、「カテゴリー」は階層性を持つが、TABLE 1 では最上位のものを CG、次に大きな単位を「カテゴリー」、その一つ下のまとまりを「下位カテゴリー」とした。

Table 3 基礎的カテゴリー

カテゴリーグループ	中カテゴリー	下位カテゴリー
対人関係	姑との関係	干渉しすぎず援助し合う 気を使う
	姑とのコミュニケーション	我慢する 聞き流す 無理なことは断る 感謝の気持ちを伝える 間接コンプリメント 旦那に取り持ってもらう
家族の形態	夫と共有する	
	世代間境界をもつ	世代としての単位をもつ 家計を分ける お互いに干渉しあわない
自分自身	家族のスタイルを確立する	
	ありのままの自分である	無理をしない 逃げ道を作っておく 自分を持つ 気にしない
	家族への気遣い	配慮する 折り合いをつけ 強張しすぎない

本研究で生成されたカテゴリーは、前述の3つのCGからなるが、【対人関係】というCGは、姑に関するものと、【旦那との共有】に分かれている。姑に関するものは【姑との関係】と【姑とのコミュニケーション】が挙げられた。【姑とのコミュニケーション】の中には実際の相互作用場面で起こる嫁の対応が含まれているため、【姑との関係性】とは別に扱った。

【家族の形態】というCGは、【世代間境界をもつ】ことと、【家族のスタイルを確立する】が挙げられた。前者は親世代との生活からある程度距離をとることへの認識であり、後者は同居しているということ踏まえて、家族独自のスタイルを作ることに対する認識である。

【自分自身】というCGには、【ありのままの自分である】と、【家族への気遣い】が挙げられていた。前者は、多世代同居の中において自分らしく生活するための工夫、後者は家族に対して気をつけていることが挙げられた。

近年において、子を持つ母親の就業を促進するとされているように（西本ら, 2004 ; 前田, 1998）、多世代同居も各家庭によって多様化し、これまでとは違う同居のスタイルを確立する必要性があるのではないかと推察される。

【対人関係】において、大部分を占めているのは、姑との関係性に関連する部分である。このことから見ても、嫁にとって姑とうまくやっていくことはとても重要視されているであろうと考えられる。松島(1985)で指摘されているように、夫が嫁姑関係の調節をしていることも示唆された。また、北村(1998)は、現代の嫁姑関係はかつての「姑優位型」から「嫁姑対等型」、さらには「嫁姑優位型」へとシフトしているように、嫁は家族の要求にも状況に応

じて適度に応じながらも、同居という環境の中で自分らしくあろうとする姿も現代の多世代同居において見られることが考えられる。

これらの結果から、嫁が認知する同居の適応促進要因として、姑とうまく関係を取りながらも、親世代との関係性には適度に距離をおき、家族を気遣いながらも自分らしく生活する必要があることが示唆された。また、世代間は協会を持って接し、それぞれのスタイルを確立すること、さらに、嫁自身はありのまま無理をせず、家族に対して配慮、折り合いをつける姿勢で望むことが重要であることが見出された。

研究3：妻が認知する同居のメリット・デメリットの認知に関する質的検討

問題と目的

多世代同居における規範、つまり長男なら同居するものというような規範が薄れてきた昨今、ますます家族形態が複数の選択肢の一つとして考慮されるようになるものと思われる。その際意識されるのが、同居のメリットとデメリットであろう。

よって本研究では、夫方の両親と多世代同居を経験した女性へのインタビュー、そして自分の両親との同居を経験した女性へのインタビューにより、同居のメリット・とデメリットについて検討する。

方法

データ収集は研究1に、分析方法は研究2に準ずる。

結果・考察

【夫方多世代同居メリット】

A 子どもの養育・家事の手助け	子どもの面倒を見てくれる（急でも）
	子どもの養育について相談できる
	家事を手伝ってくれる （仕事、学業の）時間が持てる
B 金銭的補助	金銭面で補助してあげられる。
	金銭面で補助してもらえる
C 安心	親が独居ではない安心感 何かあってもすぐに気づける
D 自分の将来への投資	将来自分の面倒を子どもが見るシステムを自然に作れる。
E 自分の性格への影響	自己主張しなければ生きて行けないと思うようになり強くなった。

	成長できる。気遣える人間になど
F 子どもの性格・環境への影響	やさしく気遣いできる子になる、協調性が育つ 遊びのバリエーションが増える。子どもが楽しそう
G 世代双方への精神的メリット	単純に人数が多いと楽しい 精神的な援助をし合える 親世代が孫と関わって楽しそう
H 世間体	世間体がいい 長男の務めを果たせる

【夫方多世代同居デメリット】

a 配慮・精神的束縛	自由に行動が出来ない。 伸び伸びとできない。気を使うくつろげない。ストレスがたまる ストレス性疾患で病院通い。 食べたいものが食べられない、偏る 自分のペースでは暮らせない。 行動・精神両面で束縛・干渉される
b 金銭的負担	金銭的負担が大きい。
c 家庭内の葛藤	葛藤が多い（家庭内の複雑な人間関係） 姑からのいじめ。 自分の悪口を子どもに吹き込まれる。 舅・姑のことで夫婦喧嘩が耐えない。夫婦仲が悪くなった。信頼できない ご近所に自分の悪口を言いふらされるので、世間体が悪い 家族全体の雰囲気が悪い。食卓が辛い
D 子どもへの悪影響	子どもがすさむ。きつくなった。 明るくほがらかだったのに暗くなる。 お年寄りを拒絶するようになった。 甘やかされ過保護に育てられた

また、本研究においては、実の親との同居に関するインタビューも行った。同居メリットについては、夫方同居と同様のカテゴリーに区分されたが、同居デメリットについて、独自の区分があったため記載する。

【妻方同居のデメリット】

a 夫と親の板ばさみ	夫が親の愚痴をいうのを聞かなければならない。夫がこちらの生活に合わない 血のつながりがある同士、つまり夫がいなければうまくいくが、夫が入るとギクシャクする。 夫がストレスをためている。家に帰らなくなった。
b 責任	子育てや家に関する責任がすべて自分に来る。自分が大黒柱。世間体や人目が気になる。
c 親への不満	親の子育てに不満がある
d 子どもへの悪影響	ストレスがたまって自分が子どもにやつあたりしてしまう。 祖父母が孫にきつくなった。同居前はかわいがってたのに、今はがみがみ。 子どもが神経質になった。
e 親の依存	親の病院の送迎などで時間が取られる。話し相手など依存される

本研究で生成されたカテゴリーとして、夫方多世代同居のメリットについては、【子どもの養育・家事の手伝い】、【金銭的補助】、【安心】、【自分の将来への投資】、【自分の性格への影響】、【子どもの性格への影響】、【世代双方への精神的メリット】、【世間体】という9つのカテゴリーグループを得た。また、同デメリットについては、【配慮・精神的束縛】、【金銭的負担】、【家庭内の葛藤】、【子どもの性格への影響】という4つのカテゴリーグループを得た。

また、妻方多世代同居のデメリットについては、【夫と親の板ばさみ】、【責任】、【親への不満】、【子どもへの悪影響】、【親の依存】という5つのカテゴリーグループを得た。

本研究では、データから多世代同居のメリット・デメリットに言及する部分を抜き出し同類をまとめてカテゴリーに区分していった。しかし、多くの被験者のデータをまとめるというボトムアップの手法では、メリットとデメリットが乖離、つまり表裏の関係にならないことが伺えた。よって今後同居満足度との関連を考慮する必要があると感じられた。

また、夫方多世代同居と妻方同居のデメリットを比較すると、夫方同居には受動性への苦痛が伺えるのに対し、妻方は自分が能動的に家族を運営しなければならないことへのストレス

が多く感じられた。

またこのインタビューにより一方が同居に多くのメリットや情緒的満足を感じていることが伺えた場合でも、逆に同居する姑側のデメリットが推測されるなど、双方向で考慮する必要があると思われる。

研究4：FITを用いた嫁・姑・夫の関係性と勢力の検討

問題と目的

本研究ではインタビュー調査とは別の視点から家族関係を把握するために、柴崎・丹野・亀口(2001)によって重要とされたイメージ的な家族関係について、FIT(家族イメージ法：亀口, 2003b)を用いて調査を行った。

これまでのFITによる研究は夫婦・親子関係を中心とした研究であり、子の視点からの研究である。新藤・相模・田中(2002)は、子の視点から得られた同居家族について「同居家族に比べると核家族の子どもは父母の結びつきをより強く感じている」と指摘しているが、妻視点も多世代同居家族についてもその知見は少ない。

よって、本研究の目的はFITを用いて多世代同居家族の関係の特徴を探索的に調査することとする。その際、家族をシステムとして捉えるモデルとして、Heiderのバランス理論を用いる。

バランス理論とは、関係が肯定的であるか否定的であるかを±の記号にあてはめ、その積が+であればバランス状態、-であればインバランス状態となる。インバランス状態は心理的な緊張を伴う不快な状態であるため、どれか一つ記号を変えることによりバランス状態へ向かう力が働くと考えられている(原田, 1999)。

方法

被験者は研究1に準ずる。

調査方法：郵送法を用いて調査を行った。

教示：電話インタビュー時に、「家族に関するアンケートを送付を送付させていただいてもよろしいでしょうか？」と同意を得、FITと同時に「多世代同居をしていた際の家族関係を思い出し、『あまり深く考えずに』シールを貼り、線を引く」と説明する書面を同封し、作成を求めた。

実施手順：①家族と一緒にいる場面を想起 ②家族のメンバーの力を色の濃さで選び、向きを決めて張り、誰かを書く③結びつきを線で書き加える。

得点化：パワーはもっとも濃い色を5、最も薄い色を1として、結びつきは「強い～」を3、「結びつき～(ふつう)」を2、「よくわからない」を1として換算した。

結果

インタビューを行った被験者中、FITの有効回答数は16名であった。現在の家族構成はサンプルごとに異なっていたため、本研究での分析対象は記述が全サンプルに共通しており、また多世代同居家族の特徴の一つである妻(Ave=44.0歳)姑(Ave=73.9歳)およびその間にいる夫(Ave=48.1歳)の3者のパワーとその結びつきを分析対象とした。バランス理論における+と-の判定は、結びつきの3者の結びつきが平均点より大きければ+、平均点以下であれば-とし、バランス(+群(7名)とインバランス(-群(9名)の群分けを行った。

これらに基づき、バランスによるパワー(Table4 Figure2)及び結びつき(Table5 Figure3)の違いを見るため、*t*検定を行った。その結果、有意な差があったのは結びつきの「妻姑」($t(14)=2.837$ $p<.05$)及び「夫姑」($t(14)=3.269$ $p<.01$)だった。その他については有意な差が見られなかった。

またバランス理論以外に、妻の仕事・最終学歴・同居形体・台所・食事・家計・親の同居経験・子どもの数などで検討を行ったが、どれも差は見られなかった。

考察

本研究では、夫方多世代同居家族における嫁・姑・夫の3者のパワーと結びつきについて、バランス理論の視点から検討を行った。その結果、+群よりも-群の方が「妻姑」および「夫姑」の結びつきが強いことがわかった。また、統計的に有意ではないものの、-群の方が「姑力」が高いことがうかがえる。

夫・妻のどちらかに対して結びつきを強く、つまり、積極的に関わりを持ち、姑がある程度の力を持っていると妻が認識した場合、その関係は妻にとってインバランスで不快なシステムとなるのだろう。結びつきが強く、働きかけがある場合、姑の力を意識する場面が多くなるため、その力は大きいと認識されやすくなるだろう。そのため、妻にとってのインバランスな家族においては姑が力をもっている可能性が少しうかがえたのかもしれない。

姑があまり積極的なかわりをしない方が妻にとってはバランス状態が保たれやすいととれる結果となったが、これはインタビュー

調査の時に多くの被験者によって語られていた「距離感」と結びつくのではないだろうか。妻から見た場合の姑との良好な関係を維持するための方法として、関わり過ぎず、お互いにとって適切な距離感で関わっていくということが大切なのだろう。

だが、これはあくまでも妻の視点であり、今回示された3者関係におけるバランス状態は7人中6人が「妻力」の関係が+、姑と関わる他二つが-となる形であった。これは、姑の視点からしたこの家族関係が不快ではないかどうかについては疑問が残る。これについては、舅や子どもなど、他の家族との関連も含めた検討を行う必要があるだろう。

また本研究では結びつきの内容については検討されていない。今回はあくまでも相対的な結びつきの強さからみた+であるため、妻にとっての意味付けとしての+ではない。インタビューを通してのFITについて再度検討する必要があるだろう。

本研究では郵送にてFITの作成を求めた。そのため、教示が不十分であり、中坪・新谷・坂口・塩見・亀口(2006)や前出・島谷(2004)にある向き・距離・配置領域・世代間境界・占有率などのFITの多彩な項目が十分に活かすことが難しくなってしまった。

本研究により多世代同居においてバランスを保つために、姑との距離感が一つのポイントとなることが示唆された。

Table4. パワーの平均値

	妻力	夫力	姑力	Ave
+	3.57	4.14	3.00	3.57
-	3.67	4.11	3.78	3.85
Ave	3.62	4.13	3.39	3.71

Table5. 結びつきの平均値

	妻夫	妻姑	夫姑	Ave
+	2.57	1.71	1.71	2.00
-	2.67	2.44	2.56	2.56
Ave	2.62	2.08	2.13	2.28

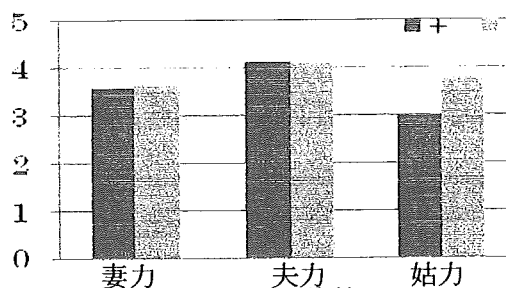


Figure2. パワーの平均値

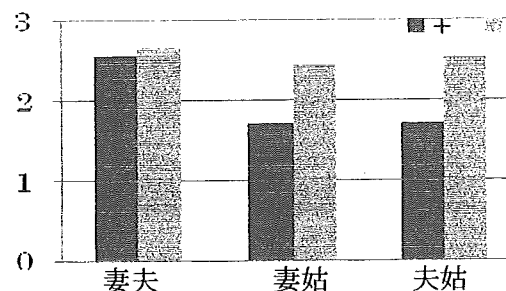


Figure3. 結びつきの平均値

研究5：妻方多世代同居における親子間葛藤と対処の検討 問題と目的

第3回全国家庭動向調査(国立社会保障・人口問題研究所, 2003)によると、妻が30歳から44歳までの夫婦のうち、夫あるいは妻の親と同居している夫婦は25.3%であるが、妻の親とのみ同居しているのは全体の7.7%であるという。妻の実親と同居するケースは多くはなく、社会的にも義理の親との同居に比べ葛藤や困難が少ないものと見られることが多い。先述の第3回全国家庭動向調査においても、同居する母親の家事協力は特にフルタイムの場合に、夫方同居に比べて妻方同居の方が大きいことが示されている。そこから、現代女性のライフスタイルに合致した家族形態のようにもみえる。

また、一連の研究プロジェクトの調査が進行する中で、妻方の親と同居するという形態において、夫方の親との同居にはない独自の問題やその対処が存在することが見出されてきた。

心理学においては多世代同居に焦点を当てた研究自体があまり行われていないが、妻方同居に焦点化した研究は見られない。そこで本発表では妻方同居を経験している女性へのインタビューによる事例検討を行った。本研究は、妻方多世代同居における研究の論点を見出すことを目的とした探索的、萌芽的研究である。

第5回世帯動向調査(国立社会保障・人口問題研究所, 2004)によると、配偶者の有無に関わらず娘と同居するケースが、全同居者のうち29.1%と漸次的に増加していることが示されている。また、夫方同居は減少しているものの妻方同居の件数には変化がないことも示されている。このような現象を踏まえると、今後は配偶者を持つ女性も自身の親と同居という選択をする可能性が増加することが予想され、その同居の実態や生じうる問題、それへの対処について検討することは、これからの家族の援助に貢献するものと考えられる。

方法

データ収集の内容は研究1に準ずる。筆者は夫方同居8名を含む多世代同居経験者12名にインタビューを行ったが、本発表ではそのうち、実親との同居経験のある女性3人を分析対象とした。3人のインタビューの平均時間は90分から130分であった。以下に本発表で取り上げる3ケースの属性、同居の様子を示す。以降、プライバシーに関わる部分については適宜変更を加えている。

Aさん: 調査時46歳。パートタイム。父、母、夫、子ども2人と同居中。転居を機に、結婚5年目から約19年間同居。自身は長女、夫は次男である。完全同居。

Bさん: 調査時44歳。パートタイム。父、母、夫、子ども3人と同居中。妻が資格取得のため進学するのを機に、結婚2年目から5年間の転勤を挟んで約7年間同居。同居は夫の提案であった。自身は長女、夫は長男(両親とも死別)。完全同居。

Cさん: 調査時31歳。パートタイム。祖母、母、父、夫、子ども1人と同居中。結婚当初から約7年間同居。自身は長女、夫は次男。完全同居。長子が家を継ぐのは当たり前、という認識がある地域に育った。

これら3名から得られたインタビューデータから逐語録を作成し、分析のための資料とした。

結果と考察

妻方同居における葛藤について明らかにするため、3ケースで共通して述べられていた内容に絞って検討を進める。以下、①同居前後のイメージの変化、②の順に考察する。データの引用部分は下線表記とした。また、注釈をカッコで挿入した。

① 同居前後のイメージ: 3ケースとも、同居開始前にはあまりネガティブなイメージは持

っておらず、「B: 色々いいことばかり考えてましたよ。自分に得するような」「C: 勝手にご飯もあれだし、住みなれてるし、みたいな(笑)」とあるように期待が勝った状態で同居生活に入っている。また「A: 主人と母がうまくやっていけないんじゃないかなーと思ってました」とあるように、ネガティブなイメージがあったとしても、夫と親の齟齬を予想する程度であった。しかしながら実際同居をするようになって、夫と親との板ばさみになるというある程度予想のできた問題と共に、自分自身と親との関係に困難を感じるようになったという。この点について次項で詳述する。

② 家族内での問題と対処: 3ケースとも、孫に対して厳しすぎる、甘すぎるといった点では異なっているものの、総じて子育てに関する親子間葛藤が語られた。親世代と祖父母世代で子育てに関するズレがあるのは世代間ギャップや立場の違いもあり、珍しいことではない。また夫方同居でもよく見られる葛藤内容である。妻方同居では、実の親が葛藤相手であることから、自身の要求を通すような対処がしやすいのではないかと予想されるが、少なくともこの3ケースにおいてはそうではなかった。どのケースも親に対して反論ができず、フラストレーションを溜め込んでいることが語られた。

多世代同居においては、「親であることと子であること」、あるいは「親であることと祖父母であること」という重層的な親子関係が日常的にみられるが、妻方同居の家族関係においては、もともとの「親子」という関係性がより強く現れるようである。例えばCは、実親に反論できないでいる理由について以下のように語っている。「C: ずっとこういう感じで、変な言い方すると、ずっといい子いい子で来たっていう感じ? (中略) 前にすごく、自分のなんだったかな? 忘れちゃったんだけど、自分の気持ちを言ったら、昔はお前いい子だったのに、社会人になったらだめになったみたいなことを言われたんですよ。それがすごいショックで、昔はいい子だったのに今はなに? みたいな感じで」。A、Bでも同様に、親に反論できずに問題を抱え込むという対処がパターン化していること、またそれは自身が子どもの頃から続いていることが語られた。さらにBは、「B: あまりにも親が私に言うてるもんですから、それを言われないようにするには、子どもにああしなさいこうしなさいを押し付けるしかなくなって」と語るように、親からの指摘を逃れるために、その指摘の源泉となっている子どもの行動を制限する

ような対処をしたことを語った。

また、親も同様に娘を「子」として見ている様子が以下のような語りから推察される。

「C: せっかく私が洗濯物たたんでも、気に入らなくてもう1回たたまれたりするのね。(中略) いつまでも子どものままなのね。(中略) あとね、洗濯物をね、干してくれるんだけどね、それもいやだ。私のはやらなくていいよって思うんだけど、恥ずかしいじゃないですか」

このように、祖父母・親になった後も親子という関係が持ちこされ、それに関わる問題があっても「自分たち親子の問題である」という認識から夫にも伝えにくく、我慢ししかない、という家族間葛藤のパターンが見られた。しかしながらBからは関係の変化も語られた。「B: (最初は) 強く言い切れずに、あんただってこうやって育ってきたんだからって言われると、何もいえず、そっかっていう部分もあって (中略) 最初のころはやっぱり私たちはこう思うって言うのと、そんなのはっていうのもけっこう言われました。やっぱり。(中略) 私たちの子どもだから、私たちがそういうふうと考えて今は育ててるから、とりあえず今は黙って見とってっていうことで、(親からの指摘は) 半分になったかもしれないですね。(中略) わからないから教えてーでしたんで、最初は。だからまあ、親としては、教えてあげなきゃっていう気持ちで余計、言葉が出すぎてた部分もあったのかもしれないですね」。Bは転勤によって一時期自分たちだけで子どもを育てたことで、自分たちこそが子どもの親であるという認識ができたと言った。

子どもを持ったら親役割に、孫ができれば祖父母役割にスイッチするといった旧来型の発達観よりも、発達に伴って多重な役割が付与されていくという見方の方が現代のライフスタイルに合致していることは確かである。しかしながらその多重性のために、親子共に次の世代・役割に移行することが難しくなっている様子が見出された。実親との同居においてはこの多重性が日常的であるため、移行の難しさが顕現化しやすいのかもしれない。実親との同居には様々な楽しみ・利点があるが、難しい面も多々ある。家族成員の世代に合った関係性を作っていくことと共に、個々人が各々の世代的課題を越えていくこと、特にジェネラティビティ(生成継承性)の感覚を発達させていくことが多世代同居家族の適応に貢献するのではないだろうか。

全体考察

以上のように、5つの研究段階から多世代家族同居の包括的な検討が行われた。研究1では属性変数と同居満足度の関連が、先行研究から得られた知見と一致する傾向もみられたものの、妻の学歴が同居満足度に影響するなど本研究から新たに得られた知見も散見された。多世代同居を満足して行うことができる属性変数が確認されたことで、同居選択時に留意すべき新たな知見の提供が可能となったと思われる。また、研究2・3では同居のマイナス側面のみでなく、同居メリットや適応促進要因など、同居に必要とされる社会的スキルの検討が行われた。これらの獲得過程の質的検討から、葛藤対処の方略や必要なパーソナリティ、態度の提示がなされたことは、多世代同居に苦渋する嫁世代や、今後同居を考える孫世代、家族葛藤を扱う専門家にとって有益な情報提示がなされたと思われる。さらに、研究4では、嫁、姑、夫関係をバランス理論と家族イメージから検討し、姑との関係が家族全体の構造認知に影響を与えているという結果が得られた。これは、姑との距離感や勢力関係が、嫁の家族構造の認知の決定因になる可能性を示唆したという点で、多世代家族に特徴的な家族心理学的知見が得られたと思われる。最後に、研究5では、少数ではあるが妻方の多世代同居女性の葛藤とその対処が検討された。結果、嫁姑関係のない妻方多世代同居にも、質的に異なる葛藤やその対処があることが先駆的に提示することができた。

これらの5段階の研究から、多世代同居の心理的側面、特に社会的スキルなど適応促進要因に関する多角的な知見が得られたと考えられる。

しかし、本研究では研究資源の都合上、子世代の妻、嫁の視点から得られたデータのみで検討を行ったため、姑や夫、孫世代への調査を行っていない。今後、多世代同居を行う可能性のある青年期の世代に調査を行うことで、複眼的な知見を得ることができるとと思われる。また、電話インタビューという特質上、大規模なデータ収集を行うことは困難であった。本結果を踏まえ、今後は質問紙による大規模調査を実施する必要があると思われる。

引用文献

張建華・七條達弘・駿河輝和 2001 出産と妻の就業の両立性について—「消費生活に關

- するパネル調査」による実証分析.季刊家計
経済研究,51,72-78.
- 原田純治 1999 社会心理学—退陣行動の理
解.プレーン出版.
- 今川峰子・譲西賢・齋藤善弘 2001 家族と
住まいの生態学的研究-三世同居におけ
る家族メンバーとのパーソナル・スペース
と親密性について.岐阜聖徳学園大学紀要.
教育学部編,40,57-76.
- 亀口憲治 2003a 家族イメージ. システムパ
プリーカ.
- 亀口憲治(監) 2003b FIT (家族イメージ法)
マニュアル. システムパプリーカ.
- 柏木恵子 1998 結婚・家族の心理学 一章.
ミネルヴァ書房.
- 北村安樹子 1998 現代の嫁姑関係～姑世代
へのアンケート調査を通して～. L D I
report,95,33-61.
- 国立社会保障・人口問題研究所 2003 第3回
全国家庭動向調査.
- 国立社会保障・人口問題研究所 2004 第5回
世帯動向調査.
- 厚生労働省 2008 国民生活基礎調査.
- Leyendecker,B.&Schoelmerich,A.,2006.Cros
s-Cultural Perspectives on Parenting.5th
Meeting of International Academy of
Family Psychology.Monday,June12,2006.
Program & Abstracts.p2.
- 前田信彦 1998 家族のライフサイクルと女
性の就業—同居親の有無とその年齢効果—.
日本労働研究雑誌,459,25-38.
- 前出・島谷(2004)
- 松島宏子 1985 農村家族における嫁姑関係
の変遷—静岡県志太郡岡部町朝比奈地域の
調査から—.お茶の水女子大学人文科学紀
要,38,182-197.
- Morgan,P.,K.,Hiroshima 1983 The
Presistence of Extended Family Residence
in Japan: Anachrinism or Alternative
- 永瀬伸子 1994 既婚女子の雇用就業形態の
選択に関する実証分析—パートと正社員.日
本労働研究雑誌,418,31-42.
- 永瀬伸子 1997 女性の就業選択—家庭内生
産と労働供給(中馬宏之・駿河輝和編 雇用
慣行の変化と女性労働.東京大学出版
会,279 - 312.)
- 中坪太久郎・新谷佑希・坂口健太・塩見亜沙香・
亀口憲治 2006 家族イメージ法(FIT)を
用いた質的研究法の開発 東京大学大学院
教育学研究科紀要 46, 227-238.
- 西本真弓・七條達弘 2004 親との同居と介
護が既婚女性の就業に及ぼす影響.季刊家
計経済研究,61,62-72.西文彦 2001 平成12
年国勢調査からみた我が国の若年未婚者の
親族との同居の状況.世界と人
口,333,46-51.
- 東海林麗香 2006 夫婦間葛藤への対処におけ
る譲歩の機能-新婚女性によって語られた意
味づけ過程に焦点を当てて-.発達心理学研
究,17(1),1-13.
- 柴崎暁子・丹野義彦・亀口憲治 2001 家族
イメージ法のプロトコル分析と再検査信頼
性の分析.家族心理学研究, 15(2), 141-148.
- 滋野由紀子・大日康史 1999 保育政策が
出産の意思決定と就業に与える影響.季刊社会
保障研究,35(2),192-207.
- 新藤克己・相模健人・田中雄二 2002 小学
生の「家族イメージ」に関する研究.家族心
理学研究,16(2), 67-80.
- 鈴木淳子 1987 フェミニズム・スケールの
作成と信頼性・妥当性の検討.社会心理学研
究,2,45-54.
- 山上俊彦 1999 出産・育児と女性の就業と
の両立可能性について.季刊社会保障研
究, 35(1), 52-64.

研 究 助 成

社会学·社会福祉学的研究

